「東アジアプログラム」と東アジア「越境人」の育成２

柳 静我・柳原 邦光・岸本 覚・稲津 秀樹・小泉 かさね・吳玲青・李晓红・陈永福・吴艺

Cultivating Transnational Talents in East Asia through the East Asian Program: Part II

YU Jeungah, YANAGIHARA Kunimitsu, KISHIMOTO Satoru, INAZU Hideki,
KOIZUMI Kasane, WU Ling-Ching, LI Xiao Hong, CHEN Yong Fu, WU Yi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第15巻　第2号　抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.15 / No.2

平成31年 3月 20日発行　　March 20, 2019

「東アジアプログラム」と東アジア「越境人」の育成２

柳静我*・柳原邦光*・岸本覚*・稲津秀樹*・小泉かさね*・吳玲青**
李晓红***・陈永福***・吴艺***

Cultivating Transnational Talents in East Asia
through the East Asian Program: Part II

YU Jeungah*, YANAGIHARA Kunimitsu*, KISHIMOTO Satoru*, INAZU Hideki*,
KOIZUMI Kasane*, WU Ling-Ching**, LI Xiao Hong***, CHEN Yong Fu***, WU Yi***

キーワード：東アジアプログラム、越境人、東アジア研究
Key Words: the East Asian Program, Transnational Talents in East Asia, Research for East Asia

Ⅰ．はじめに（柳静我、柳原邦光）

鳥取大学地域学部では、海外の諸大学と学術交流協定を締結し、研究交流と学生交流を行っている。そのなかの 1 つに「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」がある。これは、学生が海外プログラムなど様々な企画への参加経験を通して、相互理解や交渉に必要な語学力・学術的な知識・現地感覚を身につけることを目的としている。その柱は 2 つある。「東アジア研究」と、本稿で論じる「東アジアプログラム」である。

「東アジア研究」では、2015 年度から「国際化拠点整備事業費補助金（グローバル人材育成推進事業）」を、2017 年度からはその後継である「鳥取大学グローバル人材育成支援プロジェクト」（「ポストグローバル」）を活用して、中国（大陸）などをはじめとして国内外の研究者を招いて講演と意見交換会を開催して「東アジア地域学」の構築に向けて努力を重ねている[1]。

もう 1 つの「東アジアプログラム」は、東アジアの諸大学の学生を迎えて行う「東アジア・日本語・歴史・文化研修プログラム」で、2016 年度にスタートした。第 1 回は 3 大学、すなわち、厦門大学、翰林大学校、高雄師範大学の学生と教職員を合わせて 41 名が参加した。第 2 回となる 2017 年は、厦門大学と高雄師範大学から 14 名の学生と教職員 5 名を迎えて行われた。

なお、この間に変化があった。まず翰林大学校である。日本語学科の学生たちが多数参加していたが、2017 年度は鳥取大学国際交流センター主催の語学研修プログラムへの参加となった。次に、地域学部では新たに梨花女子大学校人文学部の学生たちを迎えて、「東アジアプログラム」とは別個に「東アジア歴史文化プログラム」を 2 回開催した。第 1 回は 2017 年 7 月 10 日～14 日で、同大学の学生 11 名と教員 1 名が参加した。第 2 回は 2018 年 2 月 22 日～25 日で、学生 6 名と教員 1 名の参加があった。2 回とも地域文化学科の学生たちがサポートした。第 2 回目の両大学の学生たちによる発表会では、地域文化学科の学生 2 名が韓国語でプレゼンテーションを行った。このほかに、梨花女子大学校（ソウル）を拠点として「ソウルの都市形成と文化―朝鮮・日本植民地期を中心に―」をテーマとして「韓国歴史・文化・地域調査」（8 月 20 日～25 日）を行い、地域文化学科の学生 6 名と教員 3 名が参加した。両大学の学生たちはそれぞれの機会で互いにサポートし合って、親密な関係を築くことができた。

本稿は、2017 年度「東アジアプログラム」の企画から実施まで関わった鳥取大学、厦門大学、高雄師範大学の教職員など 9 名による共同執筆である。それぞれの立場と役割から「東アジアプログラム」を

*鳥取大学地域学部地域学科
**高雄師範大学歴史文化及語言研究所
***厦門大学人文学院

[1] 2015～2017 年度で延べ 18 名の研究者を招聘し講演会を行った。

振り返り、プログラムの意義と可能性を確認するのが目的である。

以下、最初に2017年度「東アジアプログラム」の概要と目的を紹介する。次に、各大学におけるプログラムの位置づけ（事前の準備から帰国後の成果報告、単位化など）を含めて、2017年度プログラムを中心に振り返る。具体的には、教職員それぞれの役割と自身の「気づき」などを含めて述べる。続いて、参加学生がプログラムをどのように受け止め、何を吸収したのかを分析して、学生指導におけるプログラムの意義を考える。最後に全体の記述から「東アジアプログラム」の意義と可能性について検討する。

Ⅱ. 2017年度プログラムの概要と「地域学」としての成果

1. 東アジアプログラムの日程（柳原邦光）

最初に東アジアプログラムの日程を紹介する。「2017年度東アジアプログラム日程表」にある通り、実質10日間のうち、日本語授業7回、「移動と地域」をテーマとした「地域学」[2]の講義5回、地域フィールド調査関係7回（そのうち終日が1回）である。2016年度のプログラムは大変充実していたが、詰め込みすぎでもあったので、2017年度はゆとりあるスケジュールにした。

実施期間が学部の前期授業の最終週と重なってしまったが、地域文化学科の学生たちは空き時間を見つけてプログラムに参加し、できるだけサポートしてくれた。また、3大学の学生たちは、プログラム以外にも、食事や買い物、カラオケなど、長い時間をともに過ごした。

東アジアプログラム日程表

日付	内容
7/23	夕方　鳥取到着
7/24	9：30　開校式（3330演習室） 10：00～11：00　日本語授業（小泉かさね、3330演習室） 11：00～12：00　昼食・学校案内 14：45～16：15　講義：木野彩子講師「コミュニティダンスの考え方」（アートプラザ） 18：00　歓迎会（広報センター）
7/25	9：00～11：30 日本語授業 13：00～14：30 講義：稲津秀樹准教授「社会的分断を越境する―『多文化共生』のまちづくりの現場から―」（3330演習室） 15：10～　「弓道を学ぶ」（鳥取市弓道場）
7/26	9：00～11：30　日本語授業 13：00～17：00「鳥取の自然環境を学ぶ」（浦富海岸・鳥取砂丘）
7/27	9：00～11：30　日本語授業 13：00～14：30　講義：児島明准教授「移動する家族と教育」（3330演習室） 15：30～17：00「茶道を体験する」（鳥大付属中学校茶道部）
7/28	9：00～11：30　日本語授業 14：45～18：00　3大学学生発表会・意見交換会、テーマ：「移動と地域」（3430講義室）
7/29	10：30～12：00　講義： アベ・デ・ヤマダ・ルイサ・マリア（鳥取大学スペイン語非常勤講師）「外国人が地域で生きるということ」（3430講義室） 午後：「日本の夏の行事を体験する」（岩美花火祭り）
7/30	午前：「鳥取の商業施設を見る」 午後　自由時間 夕食　バーベキューパーティー
7/31	8:30～17：00　「日本の世界遺産を見る」（姫路城）
8/1	9：00～11：30　日本語授業 13：00～17：00「日本の信仰と現代文化を学ぶ」（白兎神社、青山剛昌ふるさと館）
8/2	9：00～11：30　日本語授業 11：30～11：50 閉校式（3330演習室） 13：00～14：30 講義：劉婷玉講師（厦門大学）「中国の大航海時代」（3440講義室）
8/3	帰国

[2] 「地域学」については、柳原邦光、2017、「地域学講義」『地域学論集』第14巻第1号を参照。

2. 東アジアプログラムの特徴（柳原邦光）

東アジアプログラムでは、中国（大陸）など参加大学の学生たちは初学者であっても必ず日本語授業を受けることになっている。「まずは言葉から入る」のが基本方針である。これは東アジア関係のプログラムに関わる地域文化学科の学生たちについても同様である。学生たちは「東アジアプログラム」のほかに台湾地域調査実習、中国（大陸）の厦門大学と韓国の梨花女子大学校での「語学・歴史・文化研修プログラム」に参加して語学力と現地感覚を身につ

けていくのだが、参加するには条件がある。プログラムの事前と事後に中国語や韓国語を学ばなければならない。学生たちの意気込みは様々だが、なかには２つの言語、さらに英語を加えて３か国語を学ぶ学生もいる。留学する学生もいる。このように語学を学ぶのは、将来の飛躍を可能にする、欠かすことのできない条件だからである。

東アジアプログラムで語学の他に重要なのは、地域学の視点を組み込んでいることである。2017 年度は「移動と地域」をテーマに５名の教員が講義をした。実をいえば、これは 2016 年度プログラムのうち実施できなかったテーマである。2016 年度は、当初、「地域は少子高齢化と過疎化にどう向き合っているか」と「越境するということ」をテーマとして設定していた。国境など様々な境界を越えて生きる人々の経験から学ぼうとしたのだが、詰め込みすぎであることが分かって、断念せざるを得なかった。そこで 2017 年度に「移動と地域」というテーマで改めてチャレンジしたのである。

具体的には５つの講義を用意した。「コミュニティダンスと芸能者の新しい形」、「社会的分断を越境する―『多文化共生』のまちづくりの現場から―」、「移動する家族と教育」、「外国人が地域で生きるということ」、「中国の大航海時代」である。「グローバル化が進む今日、地域はどのような課題を抱えているのか、どうすれば克服できるのか」を「一人ひとり」の経験に着目しながら、歴史を含めて検討したのである。

講義のほかには、地域フィールド調査として大学の外に出て、鳥取の自然環境から城郭・神社・夏祭り・弓道・茶道など伝統的な建築や文化、さらには現代の文化や郊外の大規模商業施設まで実際に見て体験した。頭で理解するだけでなく身体を通して感じ取ることが不可欠である。これは「地域学」が重視していることでもある[3]。

通訳についても触れておきたい。日本語授業では、小泉かさね日本語講師のほかに、中国語を学んでいる地域文化学科の学生たちがサポートした。5 回の講義では、日本語のできる厦門大学の陈永福教員と高雄師範大学の吳玲青教員が通訳を務めた。このほかの地域調査等では、中国語のできる地域学部の柳静我教員を中心に地域文化学科の学生たちも適宜通訳をした。このように東アジアプログラムを動かすことができるのは、後述する多くの方々にご協力していただいているほか、プログラム参加者が教員、学生を問わず、それぞれできることをして、力を合わせているからである。また、大学にも協力していただいている[4]。それではプログラムの内容を具体的に紹介しよう。

3. 日本語授業を担当して（小泉かさね）

2017 年度７月 24 日から８月２日まで、計７回（24 日は 10 時～11 時、その他は９時～11 時 30 分）日本語の授業を担当させていただきました。今年で３年目となります。今回の参加者は、厦門大学７名、高雄師範大学７名、パートナーとして鳥取大学地域学部の学生約10名と厦門大学からの交換留学生１名でした。日本語を学習する上で、パートナーは大きな役割を果たしてくれます。受講生の日本語学習歴は様々です。日本語能力に差がある中で中国語を学んでいるパートナーのサポートは、授業でできる活動の幅を広げてくれます。もしパートナーがいなければ、覚えることの多い初級レベルの授業で、言葉を道具としたコミュニケーション活動は大幅に制限されたでしょう。

日本語の習得目標は、本プログラムで滞在中に必要な日本語です。例えば、自己紹介、買い物、レストランでの注文などです。また、平仮名を覚え、音と文字を一致できるようになることも目指しています。これらを『まるごと 日本のことばと文化 A1 かつどう』（国際交流基金編著、三修、2013 年）などを使って学びます。毎年のことですが、学生に会うまで緊張します。プログラムが始まる前にある程度

[3] 柳原邦光、2018、「地域学入門」、『地域学論集』第 14 巻第２号、とくに「４．東日本大震災から見えてきたもの―「いのち」を生きるということ」を参照。他に内山節、2011、『文明の災禍』新潮社、序章と第１章を参照。

[4] 宿舎については、鳥取大学のゲストハウスである「湖山クラブ」と学生合宿施設「バードピア」を利用して宿泊費をかなり低く設定した。なお、参加に関わる費用はすべて地域学部会計係で一括管理し、運用した。

教材を準備するのですが、日本語学習歴やコミュニケーション言語、漢字が使えるか、性格など、会ってからでないと対応できない部分が多いからです。これは東アジアプログラムだけでなく、他のどの短期プログラムの受け入れにも共通していえることです。そして、会ってから一人一人の記録を付け、教材を修正し、授業をデザインします。

このプログラムで特徴的なのは、わずか7回の授業にもかかわらず、参加者全員が最初からとても協力的で、すぐに和気藹々とした雰囲気になることです。これは、鳥取でのプログラム開催以前に、調査実習など授業の一環として参加国などへ行ってお世話になるなど、先生方が交流され、関係を築いてこられたからだと感じています。

そんな中で、授業で一番心掛けていることは、“楽しさ”です。プログラム後もいい思い出として残り、日本や他の参加国などとの関わりを続けるためには“楽しさ”が一番だと思うからです。教室は一つのコミュニティです。できるだけ教師と学生という力関係を取り除き、みんな対等な状態ができれば、安心して人間関係を築くことができて、楽しめる場になるのではないかと考えています。そのため、話しやすい机の配置にしたり、全員がクラスに貢献できるように、活躍できる場面を作ったり、先生として教える側にまわってもらうようにしています。

たとえば、今年は平仮名の書き取りやリスニングでパートナーが先生になりました。折り紙では留学生が先生になりました。パートナーの一人は、教える経験について「レベル差があるクラスの難しさを感じましたが、教えた経験は楽しかったです」と話していました。また、ロールプレイでは、それまでに習った限られた日本語を駆使して、コントで笑いをとることを心掛けている留学生たちの頭のよさに驚かされました。

俳句の授業では、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」の句を独自の解釈で絵に描き、他の学生たちから多くのコメントをもらった人もいました。また、絵で表現することで、文化の違いに気づくなど、新たな発見があり、様々な話題を提供してくれました。

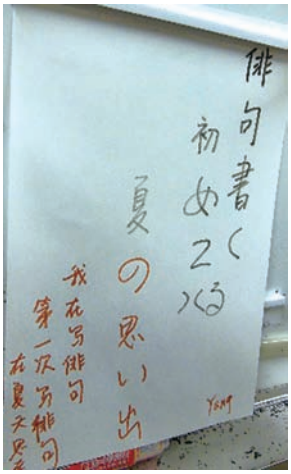
最終日の俳句の授業は3部構成で行いました。①松尾芭蕉の「古池や～」の句をそれぞれがどう読み取ったかを絵で表現し、お互いにコメントを付箋紙に書いて張ります。次に②プログラムの感想を俳句で表現し、発表しました。さらに③出来上がった句に全員がコメントしました。②は文字数を意識することで、日本語の拍（特に長音や拗音）の概念を学ぶとともに、プログラムの振り返りや感謝を伝える役割を担っています。

学習7日目にして俳句を作ることは難しいと思われるかもしれませんが、インターネットで調べ、鳥取大学の学生に訊き、割合短時間で作っています。この活動では、日本語の調べ方、辞書の利点と欠点、ネイティブに質問することの利点（同じ意味の言葉の中でどの言葉がその場面にふさわしいか）が分かるように意識しています。7回の授業の集大成として、俳句という一つの形にすることは達成感と自信になるようで、盛んに写真を撮り、SNSにも載せていました。③は②に対するフィードバックになるとともに、クラス全体で最後に交流するまとめの場にもなっています。

プログラムの終わりには、幸せと寂しさを感じました。みんながお互いにお礼を言ったり、私達にお土産をくれたり、その場に温かさや喜びがあふれていました。私はこの瞬間がとても好きです。短期集中のプログラムは短い時間で参加者に対応する難しさがあります。会ってから授業内容を変えたり、授業中でも流れによっては教案を捨てたりします。その時のその場の状況を活かして学ぶ方法を変えることは普通なのですが、短いプログラムでは、相手の情報が少ない中での対応を迫られるので、集中力と瞬発力が求められます。そのため、毎回、全力で試行錯誤しています。そんな中で、留学生もパートナーも助けてくれます。みんなが“場”を楽しもう、

楽しくしようとしています。確かに教師がいい授業をするために努力するのは当たり前ですが、全員がかかわる“場”を自分が何とかしなければ、と気負いすぎるのも傲慢かもしれないなと思いました。日本語については、教師は参加者より能力があるかもしれませんが、“場”を作るうえで、日本語の能力はごく一部の役割しか果たしません。だからこそ、全員が“場”を作るために自分ができることをしたんだと思います。一緒に過ごせた喜びが、努力を続ける原動力になっています。

これまで、このプログラムの修了生の中には、鳥取大学に留学生として戻ってきた学生や日本の他の大学に行った学生もいます。また、SNS や手紙などで連絡をくれることもあります。その中に、手紙とともに 1 枚の絵ハガキを送ってくれた学生がいました。その絵ハガキには、東アジア 3 ヶ国の女性がそれぞれの国の楽器を民族衣装を着て演奏している姿が描かれていました。3 人が相和して演奏している音色を思うと、その学生が言いたいことが分かるような気がしました。それは、私が言葉で言いはしませんでしたが、願っていたことでしたので、気持ちが通じたようでうれしかったです。プログラムをされている先生方のお気持ちがこういう風に現実に目に見える形となって表れてきているのだと思います。



このような感動と経験を与えてくれるプログラムに参加させていただき、本当にありがとうございました。この感動は、参加大学との関係を築き、事前の打ち合わせや、多くの煩雑な手続きをされてきた先生方のおかげです。こんな素晴らしいプログラムに関わることができて光栄です。本当にありがとうございました。

4.「移動と地域」（柳原邦光）

東アジアプログラムは学生たちに地域学を伝えるとともに、地域学をより深く掘り下げる場でもある。そのため協議を重ねて慎重にテーマを設定している。この節では、最初に各講義の内容を紹介し、最後の第 6 節で、日本語授業と 5 つの講義から地域学が何を学び、吸収できたのかを、できるだけ簡潔に述べる。なお、稲津秀樹准教授の講義については、「移動と地域」というテーマの理論的枠組みに関わる内容を含んでいるため、第 5 節でご本人に執筆していただいた。

（1）木野彩子「コミュニティダンスの考え方」

この授業は、後半にみんなでダンスをするということで、特別にアートセンターのホールを会場にして行われた。講義はイギリスで生まれた「コミュニティダンス」の紹介から始まった。

なぜダンスなのかといえば、次の理由からである。ダンスはちょうどいい運動量で歳をとってもできること、上手い下手ではなく、それぞれが自分なりに表現を工夫できること、言葉を使わないので、言葉の壁を超えられること、身体の違いを個性と考えるので、障がい者も参加できること。つまり、ここでいうダンスとは、誰でも踊ることができる「みんなのためのダンス」なのである。このような姿勢の根底には人には言葉を超えてコミュニケーションする力がある。自己のなかにあるものを率直に表現しつつ他者と交わる。そうすることで自らの可能性を開きながらつながることができる、という発想がある。

コミュニティダンスは、このようなダンスのもつ、心を立て直し、つながりを創出する力を移民対策・健康・障がい者福祉など社会問題解決のために活かそうとしている。

イギリス、特にロンドンでは、英語をうまく使えない移民が多く、様々な問題が発生するなかで、ダンスをコミュニティ形成に役立てようという考え方が元々あったという。コミュニティダンスが急速に広まったのは 1980 年代以降である。2012 年のロンドンオリンピックの際には、文化事業の一環として行われた。そのうちの 1 つである「ビッグダンス 2012」は、公的支援を得て全国で大規模に実施された。公共広場をはじめとして様々な場所でダンスが行われ、いろいろな国の文化が紹介された。観客も含めて 530 万人が参加したという。これは通常の場所（空間）の意味を変えるなど、様々な境界を越える経験となった。

日本でもコミュニティダンスの動きがあり、「ダンス経験の有無、年齢・性別・障がいに関わらず誰もがダンスを創り、踊る、アーティストが関わりながらダンスの持っている力を地域の中で生かしていく活動」（JCDN、2010、『コミュニティダンスのすすめ』、2 頁）とされている。

授業の後半では、学生たちは実際にダンスを楽しんだ。次々とパートナーをかえながら、木野講師の紹介する様々な動きをしていった。そばで見ている

と、言葉がわからなくても、お互いに相手をよく見て動き、身体にも触れることで、それぞれの間にあった距離が縮まったように見えた。最後に、木野講師の美しく厳かな踊りを見て、授業は終了した。東アジアプログラムは素晴らしいスタートを切った。

（2）児島明「移動する家族と教育」

冒頭で紹介されたのは、カナダの日系人から発せられた切実な問いである。「あなたは子どもと話ができなくなることが、どういうことかわかりますか」。この問いと向き合うために、1980年代後半から人・カネ・モノ・情報の国境を越えた移動が増大し加速化していった、いわゆるグローバリゼーションと、それにともなう「地球の縮小化」が紹介された。それは「だんだん多くの人々が国民や地域や民族の定位置やアイデンティティから引き剥がされ、外されてしまったことを特徴とする時代」（カレン・カプラン、2003、『移動の時代』未来社）の始まりだった。

「移動の時代」では、家族とともに子どもたちも移動する。日本では、多文化化する学校、日本語指導を必要とする外国人児童・生徒数の増加という形で問題化した。事例として紹介された日系ブラジル人の場合、家族の移動の理由や物語は様々であるが、移動の後、地域をみるまなざしが変わっていく。子どもたちも地域で生きる意味を一人ひとりが問い直し、どう生きるのか、選択を迫られる。その選択は自ずと複雑で微妙なものとなる。

こうした状況分析から提示されたのは、移動を「常態」として人の生を捉え直すこと、移動が人々に複数の地域性を重層的に織り込んでいくという指摘である。それは移動を前提に地域を捉え直すことでもある。移動の痕跡を異にする人々が出会い、共通の足場を新たに築こうとするところに、地域の姿が立ち現れてくる。異なる地域を生きてきた他者の声に耳を傾けて、自らのうちにある異質性や移動性に向き合う。こうして他者と自己に向き合うことで得られる「気づき」は、分断化されがちな状況を相対化し、新たなつながりを想像＝創造することにつながっていくという。きわめて重要な指摘である。

（3）アベ・デ・ヤマダ・ルイサ・マリア「外国人が地域で生きるということ」

鳥取大学でスペイン語非常勤講師を務めるマリアさんは日系パラグアイ人で、結婚して、ご主人の生まれ育った昔ながらの生活習慣の残る集落で暮らしている。パラグアイは、文化も言葉も異なる17の部族（原住民）のほか、様々な国からやってきた人々からなる移民国家である。言語も多様で、スペイン語だけでなく、多言語が日常的に使用されている。授業では、そのような国で生まれ育った女性が、自然環境も歴史も文化も異なる、外国人の少ない地域の集落で暮らすとは、どのような経験なのか、語っていただいた。

パラグアイの紹介の後、現在居住されている集落の行事がいろいろ紹介された。なかでも興味深かったのは、自宅で行われる葬儀である。集落ではみんな仕事を休んで葬儀を行うが、毎年、順番に従って決められた家が葬儀を取り仕切る。マリアさんは移住した直後にその役割を担うことになった。これは外国人でなくても大仕事で、大変な苦労があったに違いない。もちろんマリアさんにはいろいろ心配があった。とりわけ、外国から来てまもない自分が葬儀を行って、亡くなった人や集落の人たちに喜ばれるだろうか、ということだった。

マリアさんによれば、外国人が地域で暮らすには、言葉の壁、心の壁、制度の壁がある。国や自治体の努力が必要な制度の壁はともかく、ほかの2つは自身の努力で乗り越えられるという。そうだとすれば、どのように心がけてこられたのだろうか。お話をまとめれば以下のようになる。

まずは、家でじっとしていても何も始まらないので、与えられた場所や役を気持ちよく受け容れて、子どもや行事を通して人と出会い、地域とのつながりをつくってきた。そうして地域とともに新たな故郷、自分が居心地のいい場所をつくってきたが、それは子に対する親の務めでもある。

また、外国人とのつながりも大事にしてきた。鳥取県中部のボランティア団体である「Toriフレンドネットワーク」に参加して、顔が見えるつながりを目指して活動している。外国人がゴミの出し方も含めて困ったことは何でも相談できるように、また、鳥取のいいところをたくさん経験できるように努めている。子どもが日本で暮らしていくことになるかもしれない。だから、生まれ育ったところ、ルーツをよく知ることが大切だからである。

最後に、ご自身の経験から重要だと感じたことを次のように紹介された。自国の文化を大切にしながら相手の文化を受け容れること、自分の当り前が相手にとってそうではないことを知ること、地域や人のよいところを見習って実践すること、地域に溶け込む努力をして、仲間・友達をつくること、最初は人に頼りながらも、自立の努力をすること、自分が住んでいる地域を誇りに思い、故郷をつくっていくこと、先祖から自分へ、そして子や孫へと大切な文

化を継承していくこと、「違い」を意識するより「同じこと」「似ていること」を探して行動してみること、である。いずれも地域で人として生きるために経験から学び取られた貴重な言葉である。

（4）劉婷玉「中国の大航海時代」

この講義では、現代中国の多様性に着目して「誰が中国人なのか」という問いからスタートした。実際、今日中国人とされる人々は様々なところからきている。そこで注視されたのは中国の東南や海域である。伝統的な「中原」中心の歴史から、東南アジア、インド、アラビア半島、アフリカ東岸にまで及ぶ、広大な海域を視野に入れた関係史へと視界は大きく広がった。時間的にもきわめて長期に及び、次の４つの時代について語られた。古代中国と南太平洋までのオーストロネシアとの関係史、13 世紀の世界最大都市泉州の交易圏と生活、明朝時代の鄭和の大遠征、最後に今日の「一帯一路」構想である。

最初に古代中国とオーストロネシアとの関係が紹介された。いわゆる「漢人」は漢王朝時代に形成されたが、漢の南方には「百越」といわれる諸民族がいた。その特徴は、短髪、入れ墨、ヘビ信仰（蛇トーテム）で、蛇や服装からポリネシアと関わりがあることがわかる。また、マオリ族と台湾の高山族は服装が似ているほか、抜歯（下の真ん中の歯２本を抜く）の習慣がある。抜歯は日本の縄文時代にもあり、海を介してポリネシア系文化が広く共有されていた。7000 年前に大陸の福建省あたりから出発して南太平洋に広がったとされる。

次に泉州である。13 世紀に泉州を訪ねたマルコ・ポーロの記録は 14～15 世紀のヨーロッパ人の知識源となった。マルコ・ポーロの目に映った泉州（ザイトゥン）は「世界最大」の港市で、インドの商船や南中国の商人がやってきた。泉州は東シナ海、南シナ海、インド洋という大きな海域における海路と陸路の結節点であった。たとえば、イスラム商人がコミュニティをつくって活発な商業活動を展開しており、キリスト教、仏教、イスラム教など様々な宗教の融合が見られた。そのうちの１つにゾロアスター教もあった。これは炎と光を崇拝する宗教で、唐王朝時代に伝わり、仏教、道教、白蓮教などと影響関係がある。すべての宗教に関心をもつという、今日の中国人の宗教に対する態度には、このような歴史的背景がある。

泉州は宗教のほかにも様々な影響を受けている。たとえば、今日でもイスラム商人の子孫がいる。漢人と通婚して文化的にも混淆して、豚肉を食べる（泉州は豚肉消費が最も多い）。逆に、生花で髪を飾るとか、ジャスミン茶を飲むなど、イスラム商人が伝えた習慣もある。

明朝時代の鄭和の大航海はよく知られている。鄭和はムスリム出身の宦官であるが、自身は仏教徒である。1405 年から 1433 年にイスラムの優れた航海術を活用して大船隊を率いて７回の遠征を行った。このとき海賊を撃退したことで広大な海域が平和になり、海上貿易が盛んになった。さらに、中国南部の人々が東南アジアに移住するようにもなった。こうして、東南アジアの海上貿易の地図が変わり、マレーシアが貿易の中心となった。このほか、鄭和の遠征が中国に与えた経済的影響について、一例を挙げると、遠征によって胡椒が中国に伝えられ、様々な料理に使われるようになって、ヨーロッパで胡椒価格が急騰するという現象が生じた[5]。

最後に一帯一路構想である。「一帯一路」とは、中国から陸路でヨーロッパと結ぶ「シルクロード経済ベルト」と東南アジア、アラビア半島、アフリカ東岸を海上で結ぶ「21 世紀海上シルクロード」によって、中国を中心とする巨大な経済圏を構築する構想である。この政策は中国にとって大きな転換点となった。中国は諸外国の最大の投資先から、逆に多くの国々への投資国になったのである。

5. 稲津秀樹「社会的分断を越境する―『多文化共生』のまちづくりの現場から―」

（1）講義の背景

2017 年 7 月 25 日に東アジアプログラムの一環として「社会的分断を越境する―『多文化共生』のまちづくりの現場から」と題した講義を行った。講義にあたり、国家間の緊張が高まるなかで行われる民間交流の意義に鑑み、今、東アジアなる地域を誰と／どこから／いかにして考えていけるのか、という問いかけが筆者の中にあった。

なぜなら、冷戦体制崩壊以降に表面化した日中韓の間の歴史認識問題のみならず、相互のナショナリズムの高まりの果てに現出した領土・領海問題、ひ

[5] 羽田正編・小島毅監修、2014（2013）、『東アジア海域に漕ぎ出す１　海から見た歴史』「第１部　開かれた海 1250―1350 年」42－53 頁によれば、13 世紀から 14 世紀にかけて、地中海・イスラム圏が中央ユーラシア・インド洋を介して東アジアと結びつき、ユーラシア大陸の東西にわたる交流が盛んになった。その背景には「モンゴルの平和」によって広域的な政治的安定が実現したこと、陸路と海路がともに安定し相互に結びついたことなどがあった。

いては朝鮮民主主義人民共和国を含めた核問題をめぐる軍事的緊張を念頭におくことなく、このとき東アジアなる地域を議論できないように筆者には思われたからだ。それは、これらの複合作用による国境形成を通じた社会的分断が、私たちが東アジアなる地域を想像する際に予め持ち込まれてしまわざるを得ないという現状認識に依る。

他方、こうした国家間レベルの動きと、冒頭の問いかけが一見、位相の異なる議論を同時に扱っていると思われる向きもあるかもしれない。いわば、国家間レベルの「大きな」動向と、個人個人の「小さな」交流の取り組みはそもそも別の位相の議論ではないかと。だが、ここでかつてキューバ危機を目前に創造された「社会学的想像力」の思考法に立ち返り、それが「歴史と個人史とを、さらには社会のなかでの両者の関わり」を洞察することを可能にすることを思い出してみたい[6]。すると、上述のように危機が問題化される状況だからこそ、マクロに現出した国際関係の文脈（コンテクスト）と、個人レベルのミクロな経験を架橋する粘り強い思考や想像力が求められると言えるだろう。実際、こうした社会的分断の罠に対し、旧宗主国と旧植民地のあいだの連なりを見出す批判的想像力の必要性が繰り返し議論されている通りである[7]。

では、東アジアの社会的分断を越える想像力は、誰と／どこから／いかにして生起しうるのか。そしてその萌芽はどういった現場の人びとの営みに見出すことができるのか。この講義では、筆者にとっての移動する人びとをめぐる地域フィールドワークの知識から、この状況下への一つの応答を提示することを試みた。その際、念頭にあったのは、次のような地域認識とフィールドワークについての昨今の議論である。

まずは、『地域学入門』にも指摘されるように、国境を越えた「人の移動」現象の現場となる地域を[8]、構造的客観的な視点でのみ問題化せず、他ならない「わたし」自身の気づきと共に対象化する視点である[9]。これにより人の移動に伴い生起する社会問題の現場（フィールド）を、分析者と切り離した近代的な認識枠組でもって理解せず、分析者を含めた「身近な世界」の問題として捉えなおす可能性が開かれる[10]。次に、こうした地域認識へと至る反省的なプロセスとして、フィールドワークという調査方法を捉えなおすことである。近年の議論を踏まえると、それは調査方法としてのみならず、他者との関係性で問われる応答責任（responsibility）を模索する社会的行為の1つとしても考えられている。そこではグローバル化を背景にした社会的分断の暴力に晒される他者にとっての痛み、ひいては、その生を聞き取る技法（art of listening）の倫理的重要性が強調される[11]。

（2）講義の概要

このような東アジアをめぐる現況認識、そして地域認識とフィールドワーク理解に則って本講義は行われた。詳細は筆者の既発表の論考等にも譲るが、講義中に伝えることを試みたのは次の3点である。第1に、身近な地域の多様性と越境性の文脈を捉える観点と実例を、「わたし」自身の体験とともに伝えつつ、第2に、そうした地域に介入するヘイト／フォビアの論理の問題点をおさえた上で、第3に、当該問題に対する「出会いなおし」の可能性を提示することである。以下、順に概要を振り返りたい。

まず、東アジア地域の現況（上述）を念頭に置きながら、「あなたがあなたの『地域』から与えられている『問い』とは何だと思いますか」、「あるいは、あなたにとって『地域』を感じられる場面はどのような時・ところですか」という問いかけから講義をスタートした。これは上述のマクロとミクロの現実を結び付ける思考と想像力を、地域との関連において問うものである。そして講義担当者にとってこれらが切実に問われた体験として、1995年1月に起きた阪神・淡路大震災を取り上げた。当然、同震災から示唆された内容は震災から23年が経過しても未だ検討の余地があり、本講義内に全て提示できるものではない。ここでは震災被害の概要とともに、被災地域の避難所となった朝鮮学校で生まれた被災者

[6] 塩原良知・稲津秀樹編、2017、『社会的分断を越境する―他者と出会いなおす想像力』青弓社。

[7] モーリス＝スズキ,テッサ、2013、『批判的想像力のために―グローバル化時代の日本』平凡社ライブラリー、及び、塩原良知・稲津秀樹編、2017、『社会的分断を越境する―他者と出会いなおす想像力』青弓社を参考のこと。

[8] 児島明、2011、「人の移動から地域を問う」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門―〈つながり〉を取り戻す』ミネルヴァ書房、127-149頁。

[9] バック,レス（有元健訳）、2014、『耳を傾ける技術』せりか書房。

[10] 川端浩平、2014、『ジモトを歩く―身近な世界のエスノグラフィ』御茶ノ水書房。

[11] 塩原良知・稲津秀樹編、2017、『社会的分断を越境する―他者と出会いなおす想像力』青弓社。

交流をめぐるエピソードや、その後「多文化共生」のまちづくりと呼ばれるようになった多言語 FM 局の開設やアジアタウン構想をはじめ、災害を契機として立ち上がった市民活動事例を紹介した。これらが明らかにしたこととして、被災者がいわゆる「日本人」に限らない、東アジアの旧植民地も含めた諸外国にルーツを有する人びとからも構成されていたことを指摘した。言いかえると、この社会的事実は、均質的に理解されがちな地域社会が国境を越えて移動する人びと／エスニシティの多様性に裏打ちされた諸文化と共に生きられてきた文脈を有していることを示すものであった。

続いて、このような地域観に則ったときに浮かびあがるのが、冒頭の東アジアをめぐる現況を背景に旧植民地出身者を中心に向けられるヘイト／フォビアの暴力である事を指摘した。2013 年 2 月に大阪のある駅前で「大虐殺」が予告された際の映像を観つつ、マクロ次元の国境形成を通じた社会的分断が、ミクロ次元の偏見や差別と共鳴しながらジェノサイド予告として地域に持ち込まれる様を考えた。翻って、先の大震災のように生の危機を背景に立ち現れた「多文化共生」のまちづくりの論理が、多民族・多文化のあいだの関係性を「まち」の文脈に応じて結びつけていくものであったとすれば、対照的に「大虐殺」を叫ぶヘイトの論理は、その関係性を「まち」の外部から強制的に断ち切るのみならず、生の危機をももたらすものであることを確認した。そしてこれを日本社会特有の現象としてのみ捉えず、欧米諸国での「イスラモフォビア」問題と併せて―米トランプ政権誕生以降に日本語でもよく議論されるようになった―「分断社会」と呼ばれるグローバル化時代の他者問題の現われの一例として捉えておくことの重要性を指摘した。

最後に、上に述べてきた課題に対するオルタナティブな想像力の萌芽として、「出会いなおし」という言葉と、それが切実に主張された現場のエピソードを紹介した。それは 2016 年 6 月の川崎市のヘイトスピーチの現場で、ヘイト／フォビアを向けられたある在日コリアンの女性が、ヘイト／フォビアを向ける側に対して、「ともに」生きるべく差し出した手紙に記されていた言葉である[12]。東アジアなる地域を想像する際の困難が国家間の社会的分断を背景に構築されていること、そしてヘイト／フォビアがこの分断を地域に生きられる文脈を度外視して持ち込む行為であることは、上にも確認した通りである。これらの作用によって、私たちの出会いそのものが国家間の緊張のように、あるいはヘイト／フォビアの現場のように、二項対立的な他者理解に基づく差別関係に縛られることが起きている。「出会いなおし」が約束するのは、このように社会構造的に硬直させられた他者理解、ひいては差別関係から解放された別様の関係性への変容可能性に他ならない。

講義のまとめにかえて、この「出会いなおし」の見方を、ヘイト／フォビアの現場に留めず、身近な地域における他者との出会いの考察に活かす上での課題について言及した。阪神・淡路大震災後の実践を通じて一部が可視化されたように、東アジア地域も含めた人の越境移動に伴う多様な出会いが生まれてきた時空間として、今一度、身近な地域の文脈を想像しなおす営みが、東アジア地域をめぐる社会的分断の罠を越えていく上では求められる。私たちの足もとからのその地道な積み重ねの先に、「分断社会」と呼ばれるグローバル化の時代の社会問題への応答に連なる可能性もまた宿っているに違いない。地域とはこの意味で、グローバル化時代の社会問題の応答を、「わたし」も含めたローカルな地点から模索する現場（フィールド）と考えることができるだろう。以上の内容を踏まえて、講義冒頭に尋ねた「あなたにとっての地域」をめぐる問いかけを再度提示して、講義を終えた。

6.「地域学」としての成果（柳原邦光）

「地域学」としてどのような成果があったのかを検討する前に、「地域学とは何か」確認しておこう。筆者は地域学部の「地域学総説」（3 年生必修科目）で次のように説明している。

地域学の目的は、地域という枠組みに着目して、地域の個性と歴史性を尊重しつつ、「一人ひとりの生の充実」と「誰もが人として生きやすい状態」の実現に寄与することである。なぜ地域なのかといえば、そこで具体的で直接的な関係を結んで生きているからである。しかし、この関係がどのようなものなのかを知るのは容易なことではない。そのために、あらゆる学問分野と、生活の場から立ち上がってくる「生活の知」を含む、あらゆる知が動員される。

視点としては、「〈私〉の〈いま、ここ〉からの視点」、「生活の視点」、「歴史的視点」、「移動の視点」、「客観的・構造的視点」が必要である。これらの視点が互いに補い合って初めて地域学の目的を達成できるのである。そして常に見詰め続けるべきは「いのち」である。「一人ひとりがいのちの可能性を生き

[12] 塩原良知・稲津秀樹編、2017、『社会的分断を越境する―他者と出会いなおす想像力』青弓社。

きること」である。地域学の究極的な目標は、その実現に貢献することである。

そのためには「〈私〉の〈いま、ここ〉」から、〈私〉の日常から発想する方法が実際的である。ものごとが見えやすく、切実さに向き合って納得できるからである。そうすることで、やがては他の人びととだけでなく、「自然」・「過去」・「未来」と「関係を結ぶ」ことこそ「いのちを生きる」ことであるという気づきに至るのではないか[13]。

このような「地域学」を踏まえて、「移動と地域」という問いを立てた。人・モノ・情報など、様々なものが移動するとき、人はどのような課題に直面するのか、どうすれば克服できるのか、逆に移動によって地域にどのような可能性が開かれるのか、考えたかったのである。

「移動と地域」をめぐる講義からいえるのは、人が移動するとは、様々な関係から切り離され、「新たな関係を結ぶ」という課題に直面することである。移動は再スタートであるが、新たな生き難さを抱え込むことでもある。移動とともに人も地域も変わっていくと思われるが、「誰もが〈いのち〉を生きる」には、〈私〉も地域も社会も、この状況に向き合い、引き受け、身近な、できるところから工夫を重ねていかねばならない。ここに「地域の今と可能性」が立ち現れる。いうまでもないことであるが、移動を引き起こす大きな構造や、人と人とを分かち、隔てがちな、ある種の力の存在とその危険性を前にして、「誰もが〈いのち〉を生きる」ために知恵を働かせたい。

「新たな関係を結ぶ」というとき、濃密な関係を想起しがちであるが、今回の講義や日本語の授業から伝わってくるのは、顔の見える、緩やかな関係である。そしてそのような関係を結ぶことのできる機会と場の重要性である。それがあれば、ひとまず「生きられる」からである。

「移動の時代」に切実に求められているのは、以上のようなことではないだろうか。

Ⅲ. 東アジアプログラムを振り返る

地域学部の教員3名（柳、柳原、岸本）は、柳教員を中心にして、東アジアプログラムを含めて全部で4つのプログラムを動かしてきた。なかなか大変なことであるが、きっかけは実に素朴なことだった。発案したのは柳教員で、「面白そう、楽しそう」と思って動き出した。ところが、不思議なことに多くの方々に賛同・協力していただいて、どのプログラムも内容が充実してきた。

そこで東アジアプログラムに参加・協力している教員がプログラムをどのように見ているのか、何を期待しているのかを互いに確認して、今後進む方向を考えてみようということになった。これが本章の目的である。

1. 厦門大学

（1）李暁紅「美しさはここから始まった」

日本の鳥取大学との交流が始まって4年あまりになります。この間、両大学の教員と学生は、相互訪問と交流を通じて、学問的な成果を獲得するとともに、深い友情を結んできました。

最初に紹介したいのは、交流に関わってきた教員の方々のご尽力についてです。交流活動の起点は鳥取大学地域学部の柳静我先生でした。柳先生は厦門大学歴史学科民間社会歴史文献センターとハーバード大学が共同開催した学術会議に参加して、厦門大学の素晴らしい環境に魅了され、厦門大学歴史人類学科の研究方法を地域学部の学生にも学ばせたいと強く希望されました。とても素晴らしいことです。それで2015年春から、毎年、日本の大学が春休みに入った時期を利用して学生を引率して、厦門大学主催の「中華文化研修プログラム」に参加されるようになりました。こうして学生たちは中国と中国文化に対する理解を深める機会を得たのです。

柳先生の誠実で責任感ある振る舞いは厦門大学の多くの先生方の信頼を得ました。私もその一人です。私がとても感心したのは、韓国人として、日本語のほかに、清朝時代のチベット政策を研究するために中国語とチベット語を独学で修得されたことです。先生は日本で中国史研究の大家である岸本美緒先生の下で研鑽を積んでこられた、謙虚で礼儀正しい方です。鳥取大学地域学部は東アジア交流に大きな関心をもたれていますが、そのなかで柳先生は中心的な役割を果たされていると思います。地域学部の国際交流担当である柳原邦光先生と国際地域文化コース（地域文化学科）の責任者である岸本覚先生も厦門大学のプログラムに参加されました。私自身も地域学部を訪問して、厦門大学人文学院の歴史と国際戦略について講演しました。そのとき、柳先生の活動への地域学部の厚い信頼と強い期待をひしひしと感じました。厦門大学と鳥取大学の交流プログラムの成功には先生の存在が大きいと思います。ご尽力のおかげで両大学の交流事業は深まり、成果をあげているのです。

鳥取大学との交流プログラムの成功には、厦門大

[13] 内山節、2015、『いのちの場所』岩波書店、参照。

学人文学院の教員たちの協力と尽力も欠かすことはできません。王炳華先生、陈永福先生、吳艺先生、劉婷玉先生、林紅先生など人文学院の教員は、鳥取大学の教員と学生を受け入れるだけでなく、現地調査の計画立案を含めて細やかに対応しています。学生たちのために研究時間を割くことを惜しまず、積極的にプログラムに関わって、昼は授業を、夜は討論会を行っています。また、学生を引率して古くからの貿易港である泉州などで現地調査もしています。厦門大学の学生に対するのと同じ気持ちで鳥取大学の学生のために力を尽くしているのです。特に陈永福先生は最初から交流プログラムに関わり、細かな部分にいたるまで学生の世話をしています。こうした人文学院の教員たちの努力は、鳥取大学の学生に多くの学びを与えています。それは学問だけにとどまりません。教員たちの努力による交流プログラムの成功は国際交流の模範というべきもので、私はとても感心しています。

両大学の教員の真剣で誠意ある取り組みと支え合いのおかげで、プログラムを重ねるたびに、両大学間の関係は深まり、学生たちの相互理解も進みました。相手国の文化に対する興味と研究、そして互いの友情が深まったのです。

ここでエピソードを紹介します。2016 年の末、私の娘が近所で生まれたばかりの子猫を見つけました。飢えで怯えている姿を見て同情し（いつものことですが)、家で飼おうとしました。ところが家にはすでに犬が 2 匹いて、新入りの子猫を噛んだり、意地悪をしたりしました。自分たちもかつて拾われてきたことを忘れ、子猫を全く受け入れようとしなかったのです。娘はやむをえず吳艺先生に一時期子猫を預けました。

その時、吳先生の家には鳥取大学からの交換学生である長谷涼花さんが下宿していました。彼女は厦門大学主催の交流プログラムに参加して厦門大学が好きになり、留学したのです。猫好きの長谷さんは吳先生とともに子猫に愛情を注ぎました。子猫はとても元気になりました。長谷さんは帰国するとき、泣きながら子猫を我が家に返してくれました。帰国後は､厦門プログラムに参加する教員と学生たちに、子猫が好きそうな食べ物や遊び道具などを必ず託しました。可愛い子猫がいてくれたおかげで、私たちの友情はさらに深いものになりました。

現在、プログラムは着実に成長し、新たに展開しようとしています。相互訪問はごく当たり前のことになりました。他の大学も参加を希望して、さらに多くの大学の学生が参加するようになりました。私たちは各大学の教員と学生の共同努力を通じて、このプログラムを東アジア地域の学生交流の模範にしたいと思います。厦門大学にはマレーシア分校がありますので、プログラムを東南アジアへ広げ、アジア全域の学生交流のプログラムにしていきたいと思うのです。交流は厦門大学中華文化研修プログラムを始まりとして。友誼は各国の若者たちの心の中に根差し、芽生えて。全ての美しさは既に始まっているのです……！　（翻訳：柳静我）

（2）陈永福「鳥取での 3 年間の経験」

2017 年 7 月 22 日、私と吳艺职员、劉婷玉先生は学生 7 名を引率して大阪に到着しました。翌 23 日にバスで 3 時間かけて鳥取大学地域学部に着きました。3 年間で 3 回目の国際交流プログラムへの参加でした。

プログラムが始まったのは 2015 年の夏です。このときは厦門大学人文学院と鳥取大学地域学部だけの参加でした。当時は、日本語学習と学生交流を主としていました。2016 年には、翰林大学校と高雄師範大学の学生も参加しました。このときはじめて、東アジアに共通する関心対象である「少子高齢化の問題」が共同研究のテーマとして設定されました。厦門大学の学生たちは渡日前に相当な資料を収集して、発表の準備を念入りにしました。到着後は、鳥取大学の細心の準備のもと、関連する様々な講義や報告を聴き､関連施設を実際に訪ねて調査を行いました。最後に、共同発表会がありました。それぞれの国の現状と問題解決の方法について、学生たちは真剣に発表し意見交換しました。10 日間の日本語学習、調査と交流は大変忙しくて疲れましたが、とても充実した内容でした。

2017 年は、厦門大学と高雄師範大学、鳥取大学の学生が参加しました。テーマは「東アジアにおける移動と地域社会」でした。私は 2 つの講義で通訳を務めました。１つは稲津秀樹先生の講義です。先生の専門は社会学で、特に現代日本における多民族間の共生という問題です。講義は 1995 年に神戸で発生した阪神・淡路大震災から始まりました。続いて 2013 年に在日コリアンが多い鶴橋で、女子中学生が放送で在日コリアンを皆殺しにするというテロ宣言を行ったこと、2015 年には一部の日本人が川崎市在住のコリアンに対して、ヘイトスピーチを行っていたことを紹介されました。さらに、神戸港周辺にはかつて軍需工場があり、そこで働くアジア各国から来た人々や少数民族が雑居していましたが、阪神・淡路大震災のときには、多様な国籍の人々が助け合

ったことも紹介されました。私は通訳しながら、稲津先生の多民族融合共存への期待と情熱に感動しました。

もう1つ通訳したのは山田マリヤ先生の講義でした。マリヤ先生は日系パラグアイ人で、25歳の時に結婚して鳥取県に移り住みました。27年目になるということでした。先生はどのように地域社会に溶け込んできたのかを詳しく話されました。特に、地域の多様な行事や鳥取在住の外国人のための交流活動に参加した経験とそこで学んだことについて語られました。先生の講義から、外国人が組織性の際立っている日本の地域社会に溶け込むことの難しさ、日本の地方政府が多様な国籍や文化をもつ人々を包摂するために努力をしていることがわかりました。このような努力は外国人移住者が心から日本を第2の故郷とみなすよう促すものとなっています。

学生たちは日本語の勉強や調査のほかに、茶道と弓道を体験しました。お茶を飲む作法から、日本人の日常と伝統生活の知恵が優雅な「道」となり、最終的に美と徳の日本文化として継承されてきたと感じました。岩美町の花火大会では独特な屋台と地方の踊りを見ました。踊りは日本人の美と上品（優雅）な生活の追求を表すもので、厦門大学の学生たちに深い印象と多くの示唆を与えました。

最後に、私を感激させたのは、短期間のプログラムが終了して別れるとき、学生たちが泣いていたことです。話を聞いてみると、10日間に出会った親切な鳥取大学の学生たちは、想像していた日本人とはまったく違っているというのです。国際交流の大きな役割の1つは、このプログラムのように、直接顔を合わせることで互いに友情を育み、涙を流して別れを惜しむような関係になることです。そして若い世代が偏狭な民族主義的偏見を捨てて、国の違いを超えて多民族の融合と共存を考えるようになることです。

このような内容のある国際交流活動は参加者たちの心をつかみ、3年間、続けることができました。これは容易なことではありません。引率教員としては、毎回、いろいろな学生たちの世話をし、日々あれこれ心配して、心身ともに疲れてしまいます。それでも、交流が多くの成果を上げているのを目の当たりにして、この活動に満足を感じている自分がいます。これこそプログラムの大きな意義だといえるでしょう。　　（翻訳：柳静我）

(3)吴艺「東アジア地域社会研究プログラムの経験」

東アジア地域社会研究のプログラムを通した提携と交流は、既に4年間続いています。この間に厦門大学人文学院と鳥取大学地域学部は、全くの他人から仲のいい友達になりました。定期的に2つの場所で学生のための研修プログラムを行うだけでなく、教員間の学術交流、学術研究会を行い、交換学生を派遣するようになりました。鳥取大学との交換学生プログラムは「中国国家留学基金優秀学部生奨学金」を獲得し、国家レベルの認証を得ています。その後、高雄師範大学が加わって、さらに多くの仲間ができました。この全方位で多元的な提携に関わる一人として、私にも感じることがたくさんあります。これからそれをお伝えしようと思います。

まず、プログラムの成功には、提携の実質を深いものにしようとする両大学の真剣な気持ちと熱意があります。厦門大学人文学院と鳥取大学地域学部は提携協定を締結しましたが、意向確認から締結まで要した時間はわずか半年間でした。大学間の規定と手続きを守らなければなりませんので、この迅速さと効率の高さはきわめて異例なことです。

それには鳥取大学地域学部の藤井正学部長と柳原邦光副学部長、厦門大学人文学院の王炳華書記、朱菁先生、李曉紅先生の強い支持が欠かせませんでした。鳥取大学の先生たちが学生を引率して厦門大学の研修プログラムに参加される度に、私たちは人文学院の学生たちに鳥取大学を紹介し、プログラムのプロモーションを行ってきました。多くの学生たちは直接話をうかがって、鳥取大学と東アジア地域社会プログラムを具体的に理解することができました。また地域学部が人文学院の留学生のためにできるだけいい宿舎と学習環境を提供して下さっていることもわかって、教員も学生たちも感激しました。私たちはこのような提携環境のなかで、諸先生方の協力により、互いの意思を確認し尊重して、誠意をもってプログラムの迅速な実現と向上に努め、教員と学生たちのために多くの機会を提供できたと思います。

次に、プログラムを通して、参加大学の教員と学生が深い友情で結ばれていることをお伝えしたいと思います。毎年、教員たちだけでなく、たくさんの学生たちもスタッフとしてプログラムの運営に参加してきました。彼らは強い関心と意欲をもって、プログラム参加者を歓迎し、中国語の授業でサポートするだけではなく、共同の調査研究にも協力して、生活でも深い友情を築いています。教員たちもプログラムに大きな関心を注いでいます。毎年の相互交流のなかで、多くの時間を費やし、学生たちの学習や討論に参加し、調査の引率と解説もしています。他国の学生たちであっても、自分の大学の学生に対

するときと同じ気持ちでお世話しているのです。まさに「一視同仁」です。現地調査には、鳥取大学の岸本先生、高雄師範大学の劉正元先生、厦門大学の劉婷玉先生が参加されました。また、授業でも現地調査でも、鳥取大学の柳静我先生、高雄師範大学の吳玲青先生、厦門大学の陈永福先生が分担して通訳され、学生たちに詳細で正確な知識を提供されています。そのおかげで、プログラムは熱意に満ち、集中力の高いものになっています。

3 番目に、東アジア地域社会研究プログラムは参加した教員と学生たちの視野を広げ、学業を進めるとともに、プログラム自体も成長し、壮大なものになっています。最初は、違う言葉を学び、文化体験をするという普通の研修プログラムでしたが、次第に明確なテーマと方針をもつものへ発展しました。東アジア地域社会研究をテーマとし、毎回具体的な研究方向を設定して、移民社会、民間信仰、開港場の都市研究など、多様な主題をめぐって共同調査と討論を行っています。さらに互いに得意とする現地調査の方法を示すことで、プログラムの内容と質を絶えず高めています。参加大学も最初は 2 大学だけでしたが、後に高雄師範大学、翰林大学校、梨花女子大学校を加えて、試行錯誤と新しい試みを重ねて、プログラムは安定し、多元的な構成になって行きました。

交換学生については、単なる交換学生派遣から、中国留学生のための国家奨学金への申請や交換学生のための言語サポーターなど、交換学生たちが更に良い環境で学習ができるように発展しています。他にも、2015 年に私たちはプログラムの交流内容を基礎として、中国・日本・韓国合同の「キャンパス・アジア」に申請し、さらに体系的で完成した育成計画を学生たちに提供することを試みました。採択には至らなかったのですが、申請書を作成する過程で、プログラムの運営と将来の発展についてより明確な共同目標をもつようになりました。より高いレベルの韓国の大学の参加が実現すれば、厦門大学とマレーシア分校の資源を利用することで、さらに大きな設計が可能になるでしょう。

最後に、一番重要なことですが、私たちはこのプログラムが学生たちの成長に大きな役割を果たしていることに満足しています。4 年間、このプログラムに携わってきて気づいたのは学生たちの変化です。最初は遠くからのお客さんに対する好奇心と恥ずかしさばかりが目立ちましたが、毎年段々主導的になり、積極的に他の大学の学生たちと交流するようになりました。このような長期的で安定したプログラムの運営に関わることを通して、各大学の学生たちは、英語以外の言語に強い関心をもつようになっています。また、プログラムの体系的なサポートと適切な内容のおかげで具体的な成果を上げています。例えば、石潤民さんは 2016 年度の東アジアプログラムに参加した後、日本文化に興味が出て、独学で日本語を勉強し、交換学生を申請し、奨学金を獲得して、2017 年に鳥取大学に留学しました。鳥取大学に交換学生として留学した学生は、留学前には日本語がそれほど流暢ではありませんでしたが、帰国後、日本語能力試験で N2 や N1 をとって、良い成績を収めています。中国に留学する鳥取大学の学生たちも、中国語能力試験である HSK の 5 級や 6 級をとって、素晴らしい成果を出しています。2017 年度秋から厦門大学で交換学生をしていた館脇成美さんは、帰国後、日中友好のための歴史ある財団へ就職が決定しました。留学生活が大きく影響しているといえます。プログラムでの協力と運営において、知識を伝授される先生たち、大学から多くの支援を得るために尽力される学部指導者たち、一生懸命に勉強し成果をあげている学生たちに比べると、様々な調整など事務的な部分を担当する職員として私にできることは小さいかもしれませんが、私も十分幸せを感じています。というのは、それぞれの大学が学生たちにさらに美しい未来への大きな機会を与えるという共通目標の達成のために、自分にできることをして、学生たちと教員のためによりよい条件をつくろうと奮闘されているのですが、私もまたその熱意と達成感と満足感を共有しているからです。

プログラムで協力することで大学間に深いつながりが生まれていますが、それだけでなく、東アジア地域社会が共に発展していくためにもっと協力して、より美しい未来を創りたいと切に思うようになりました。私たちはこの希望を大事にしていきたいと思います。　（翻訳：柳静我）

2. 高雄師範大学

吳玲青「東アジアプログラムから得たこと」

台湾では、ここ数年「移動教室」、「行動教学」、「行動学習」という言葉で、学生たちが海外も含めて大学の外に出て具体的な生活などを学ぶことが重視されるようになりました。教育部も補助金を設けるなどして推奨しています。この傾向は高校までの課程でも見られます。たとえば、海外に修学旅行に行くとか、森の自然の中で学ぶとかです。高雄師範大学歴史文化及語言研究所でも、この方向で努力しています。

私は2014年以来、鳥取大学地域学部地域文化学科の台湾地域調査実習に協力しています。調査テーマの設定、調査地と協力者の選定、現地調査など、念入りに検討し、事前に現地を見るなど工夫を重ねてきましたが、その過程で自ずと「行動学習」のことを考えるようになりました。同じことを目指しているようですし、このような海外調査を自分の大学の学生たちにも体験させたいという思いも強くなっていました。そんなとき、2016年に東アジアプログラムが鳥取大学で始まったのです。

早速、2名の大学院生を誘って参加しました。プログラムで参加学生は日常生活で用いる基礎的な日本語と鳥取や日本の歴史・文化について学びましたが、そのほかに地域学のテーマが設定されていました。2016年度は「地域は少子高齢化と過疎化にどう向き合っているか」です。これは韓国の翰林大学校の安東奎教授（経営学部経営学科）の要請を受けて設定されたテーマで、大学教員の講義に加えて、地域福祉関係者の講演、関係施設の調査、さらに鳥取銀行の取り組み(「地方の人口減少に対する鳥取銀行の取り組み」）紹介が組み込まれていました。また、同じテーマでそれぞれの現状と問題点を紹介する学生報告もありました。同一テーマを設定して比較し学び合う方法は大変刺激的で、自国について考えるとてもいい機会になりました。

2017年度は学生7名と私を含む教員2名が参加しました。テーマは「移動と地域」で、「越境」について学びました。学生は自費参加でしたが、東アジアプログラムを「専題研究」（私の授業、2単位）に組み込んで、参加を容易にしました。学生たちは出発前にプログラムでの報告準備をおこないました。帰国後は分担して報告書を完成しました。体験したことを言葉で表現することは、ものごとを深く掘り下げ、しっかりと認識するためのいいトレーニングになりました。また、報告書作成は「行動学習」関係で一定の補助金を獲得する条件の1つとなっていますので、参加を促す助けにもなります。

学生たちにとってプログラム参加はどのような経験だったのでしょうか、何を学んだのでしょうか。これはプログラムの意義を考える上で欠かすことのできない点です。みんなが一様に口にしたのは「とにかく楽しかった」ということです。そして別れの辛さです。2017年度の場合、鳥取から大阪に向かうバスの車中では、みんな涙を流しながら別れを惜しんでいました。このシーンは大変な驚きで、私の心に深く刻まれました。

2016年に参加した学生の1人は、海外に行くことが怖くなくなりました、海外で人と触れ合って、世界を見ることのできる仕事をしたいと思うようになりましたと参加経験を述べてくれました。今、NGOの仕事に就いています。また、2017年に参加した学生のうち2名が2017年4月から地域学部に5か月間留学しました。彼らに聞いたところ、プログラムで鳥取大学での生活に慣れていたので比較的容易に適応して、地域文化学科の学生達や留学生たちと忙しいが充実した日々を送ることができました。台湾とは異なる生活環境のなかで自身の生活の仕方を反省することになり、生きていく力をつけることができました。さらに、「当たり前」が違っていて、違いの背景に何があるかを考えるようになりました、ということでした。プログラムは、確かにその後の学生たちの行動につながっていると思います。

私の大学の学生たちは、日本は自然を大事にしていて、空気がよく、清潔で、生活環境も利便性もいいという印象をもっています。実際に行ってみたいという学生もいます。そんな若者たちに人生を生きる財産になるような機会を提供したいという思いを深めています。それで、毎年3月に厦門大学人文学院で行われている同様のプログラムに 2017 年から参加しています。

最後に私自身はどうかといえば、4年間、地域文化学科の台湾調査実習のプランの作成から現地調査まで関わってきました。毎年、調査テーマの設定と具体的な調査地にはずいぶん悩みました。調査対象は私の歴史学の専門領域を超えており、自分自身の問題意識が問われることになったからです。私は今、専門的知識をベースにしつつ視野を広げて世界を見る確かな力をもちたいと切に思います。この意味で、東アジアプログラムは示唆を与えてくれます。毎回、地域学の観点から東アジア地域にとって切実なテーマを設定して、学生にとっても教員にとっても、人生において実際に役に立つ知恵と知を求めています。

このプログラムが発展し、さらに深化することを願っています。

3. 鳥取大学

(1) 柳静我「東アジアプログラムを通して見えてきたこと」

東アジアプログラムでは、毎年、新しい試みをしようと考えています。2016年度に「地域学」を導入しましたが、2017年度での試みは地域学部地域文化学科が行っている他の東アジア関係プログラムと連動させることでした。それは、韓国プログラム（2017年8月）、台湾地域調査（2017年9月）、そして中国

（大陸）プログラム（2018 年 3 月）です。具体的には、各プログラムのテーマに地域学の観点から「移動」の視点を組み込みました。東アジアプログラムのテーマはそのまま「移動と地域」ですが、その他はもう少し絞り込みました。台湾地域調査は「台湾における様々な文化の関係性」、韓国プログラム、「ソウルの都市形成と文化―朝鮮・日本植民地期を中心に―」、中国（大陸）プログラム、「福建省地域にみる建築・民間信仰・共同租界の歴史」（なお、2016 年度は「多様な文化と信仰」）です。

東アジアプログラムの「移動と地域」については、本稿のⅡ－4～6 で詳しく述べていますので、他 3 つについて簡単に紹介します。台湾地域調査「台湾における様々な文化の関係性」では、台北と台南で、保生大帝などの民間信仰の廟、仏教寺院、カトリック教会とプロテスタント教会、故宮博物院を調査しました。中国大陸の福建省から移住者とともに入ってきた民間信仰の生命力と多様性、キリスト教の現地化、大陸由来の文物と歴史に焦点を絞って、様々な信仰や文化が入ってくるなかでどのような関係性が生まれてきたのか、そこにどのような意味を見出すことができるのか、考えました。台湾の文化は、それぞれ異なる時代に持ち込まれた様々な文化が積み重なって重層的な構造をもっている、多様な文化が微妙なバランスを保ちながら、緩やかなまとまりを形成しているという印象を学生たちは受けました。「台湾の文化はこのようである」と一言で結論づけることのできないものでした。

韓国プログラム「ソウルの都市形成と文化―朝鮮・日本植民地期を中心に―」では、「朝鮮時代とソウル」「朝鮮開花期とソウル」「日本植民地時代とソウル」という 3 つの時期において、朝鮮半島を取り巻く国際関係が変化し、人や文化など様々なものが流入する中でソウルがそれらとどのような関係を結びつつ変化してきたのか調べました。そして、学生たちは、ソウルの街が中国や欧米、日本の様々な文化の影響を受けつつ、固有の文化と溶け合って豊かな風景を創り出しているという理解にたどりつきました。

中国（大陸）プログラムでは、「移動と文化」の観点から「福建省地域にみる建築の歴史」「民間信仰」「旧共同租界コロンス島の歴史と今」について講義を受け、現地調査を行いました。福建省地域の文化が自然との関わりをベースにしながらも他地域の人々や文化との複雑な関係を通して形成されたこと、さらに人の移動を通して外に大きく広がったこと、それは「中国文化」と一言では言えないものであることを学生たちは学びました。

2017 年度の東アジアプログラムとの関連について１つだけ補足説明をしますと、現地調査の対象に姫路城を組み込みました。中国（大陸）プログラムでは、福建省の「趙家堡」と「怡安堡」を調査しましたが、これらは 15 世紀倭寇の侵略から地方社会を守るため、民間が建てたものです。姫路城と「趙家堡」「怡安堡」は、規模も時期も違うものの、防衛という重要な機能を考えると、どのような共通点と相違点がみられるのか、比較ができて、広い視野で人間の営みを考察することができます。一国の枠を超えて東アジア地域へと関心を広げるということです。

このように、参加学生と教員は、東アジアプログラムの講義と調査を通じて、比較から始まって、日本とか中国（大陸）とかといったくくりだけではなく、そのような枠を超えた人の移動と文化の広がりを自ずと意識するようになりました。「東アジア」という広い地域の捉え方をするようになりつつあると思います。

（2）岸本覚「摩尼寺の歴史・信仰と日本の食」

本プログラムでは、さまざまな日本の歴史に触れてもらうことを目的としている。日本史全体に関わることは講義で実施し、鳥取の歴史については、講義と実際に見学・体験することにしている。

そのなかで、長年お世話になってきた大雲院の住職田尻氏にお願いして実施してきた 7 月 26 日の摩尼寺（まにでら）参詣について述べてみる。

摩尼寺は、その麓にある覚寺（かくじ）集落から摩尼川に沿ってさかのぼった摩尼山（357m）山腹にある。喜見山と号し本尊は帝釈天と千手観音、天台宗（律院）である。ここでは、摩尼寺の由来について、ご住職からお話があり、あわせて日本の仏教と仏像の特徴について説明があった。

この寺の縁起によると、平安時代前期、高草郡の産見の長者の熱心な信仰に対し、帝釈天が摩尼山頂の立岩（たていわ）に現れて、人々を救うこと、とくに女性に対することを約したという。このように、摩尼山は因幡国の信仰の山であると同寺に、著名な「湖山長者」の伝承に関わるものとして伝わっている。湖山長者伝説とは、『日本国語大辞典』によると、「湖山の里の長者の家では、一日で田植えを終えることになっていたが、早乙女たちが親子猿に見とれているうちに日が暮れそうになる。長者は金の扇で入日を招き、無事に田植えを終えるが、翌朝みると湖になっていたという話」である。このような「日招き長者の伝説」は全国的にあるものであるが、湖

山池と摩尼寺という鳥取を代表する名所に関わって存在することが特徴であろう。

また、民間信仰としては、鳥取に来てからも「死んだらその霊魂は摩尼山へ行く」と信じられている。とくに、女人禁制が多かった江戸時代には女性の参詣者が多く、現在でもこうした流れを見ることができる。300 段の階段を上り詰めてようやく学生達とたどりついた本堂や鐘楼などの風景は、こうした鳥取の民間信仰を実体験できるものとして学生達の脳裏に残ってもらえるであろう。鳥取とはいいつつも、同様の民間信仰は全国的に存在するものであるし、神道や仏教という宗派ごとだけではないさまざまな日本の民間信仰に触れる貴重な機会となったのではないかと思っている。

本年度参加した厦門大学や高雄師範大学の学生たちは、こうした私の意図とは少し異なり、300 段の石段手前の風景に非常に興味を示した。学生たちによれば、「どこかで見た風景」「もしかしたらアニメのようなものかもしれない」ということだった。確かに、言われてみれば「となりのトトロ」か「もののけ姫」の世界に似ているものと言えるかもしれない。山奥の宗教施設が持つ歴史と信仰を、彼らなりに感じたものではないかと思い、私たちの世代とは異なる感覚に非常に驚いたのを覚えている。

さて、この摩尼寺のもう一つの重要な体験は、戒壇廻りである。戒壇廻りとは、寺の本堂の内陣にあたる縁の下に設けた暗い通路を一周する行為のことである。そのとき、参詣者の手が本尊のほぼ真下にあたる錠にさわれば御利益があるといわれ、また、参詣者の心が正しくないとさわれないとかよくないことが起こるという伝承もある。もっとも有名な戒壇廻りは、江戸時代「一生に一度は善光寺参り」と言われてきた阿弥陀如来の霊場・長野の善光寺のものであろう。

実は、摩尼寺にある如来堂は、その長野の善光寺から山陰の鉄道開通を期して勧請し、山陰の一大霊場としようとした歴史のなかで創建された。従来の鳥取だけの民間信仰に加えて全国的な信仰を集める善光寺の信仰も併せ持つ寺院なのである。

学生たちには、携帯電話をすべてオフにさせ、真っ暗闇を体験してもらう。なかなか真の闇を体験することは現在においてはあまりない。その体験は、非常に強烈なものであろう。もちろん、けがをしないように、一列になって前の人とつながっていくので全員「錠」に触れることができたようである。現在の光に満ちあふれた世界とは異なる、闇の世界とその信仰に触れてもらう貴重なものとなった。

この如来堂の裏側から、いわば「あの世」と「この世」の境がある。無数の地蔵が立ち並び、その世界を演出している。時間の関係と、リスク回避の観点から、これより奥の院までの参詣はやめている。実際には奥の院まで行くことが、日本の寺社参詣の重要な要素なのであるが、こればかりは致し方ないと思う。日本海が見渡せる展望のきれいな場所もあるとご住職には何度も進められたのであるが、時間的な問題で余裕のあるときには実現できればと思っている。ちなみに、奥の院には、帝釈天が舞い降りたという立岩があり思ったほど遠い距離ではなかったように記憶している。

最後に、摩尼寺と言えば、鳥取では門前の、源平茶屋と門脇茶屋という精進料理の店が有名である。200 年来続いてきた源平茶屋の料理の由来（とくに『無駄安留記』に記載のある「名物蒟蒻の田楽」）について私から説明させてもらった。学生達の口にあうかどうか少し心配したが、ほとんど平らげてしまっているし、さらに田楽もおいしいと舌鼓を打つものもいて少々安堵した。元来、精進料理はそれなりの値が張るものであるが、特別にお願いして学生達に日本の食を体験できるようにしてもらっている。日本の伝統料理を食し和食文化についての認識を深めてもらえればと思っている。

以上、摩尼寺の歴史・信仰と食の体験は、日本の民間信仰に触れてもらう機会であり、寺院側の状況が許せばなるべく長く続けていきたいと考えている。鳥取には、鳥取独自のものでありながら、日本全体に関わるような歴史や文化が数多く残っており、今後学生達が他の地域の歴史や文化に触れるときにも大いに参考になるのではないかと思っている。

Ⅳ．おわりに―東アジアプログラムの意義と可能性（柳静我）

東アジアプログラムは最初から明確な意図と形をもって始まったわけではない。学生交流から始まったこのプログラムは、中国（大陸）プログラム（厦門大学）・韓国プログラム（翰林大学校、梨花女子大学校）・台湾地域調査実習（高雄師範大学）を含めて、参加者が互いに協力し合い学び合うなかで、形も内容も大きく成長してきた。その１つが、毎年、テーマを決めて、講義と調査の目的を明確にし、成果を積み重ねていることである。これまで設定したテーマは、2018 年度も含めると次の通りである。東アジアにおいて「地域は少子高齢化と過疎化にどう向き合っているのか」（2016 年度）、「東アジアにおける移動と地域」（2017 年度）、「東アジアと海」（2018 年度、実施済み）。これらのテーマを掲げて、念入りに計画を立て、必要なことを講義と現地調査を通して学ぶことで、学生も教員も、人や文化の移動とそれが生み出す複雑で豊かな関係性、東アジアにおけるその広がりと変化を、漠然とではあるが、実感するようになった。東アジアプログラムは、多様性と類似性を学び、「国」という枠を超え、相対化していくことに、視野をさらに大きく広げていくことに可能性を開いている。

たとえば、鳥取大学地域学部の学生の場合、東アジアプログラムだけでなく、他のプログラムにも参加する学生が多い。参加するにつれて、関心は国や行政などを枠組みとする文化から具体的な「つながり」と「ひろがり」へと変わっていく。習得する言語も、今では１つの言語だけでなく、韓国語・中国語・英語へと広がっている。複数のプログラムに参加することで、日本を超えて東アジアを「学びの場」とするようになったのである。

東アジアプログラムはまた、交換留学への関心を呼び起こし、留学生活につながっている。地域学部には、毎年、厦門大学から学生が留学しにやってくる。その半分以上がプログラムの参加がきっかけとなって留学を決めたということである。地域学部の学生にとっても、このプログラムや中国プログラムへの参加は厦門大学への留学につながっている。というのも、プログラムで仲良くなった学生たちは、友達や知り合いの先生がいる場所で留学生活を始めることができるからである。慣れるまでの時間が短くなって、留学生活はより安定して充実したものになるのである。台湾の高雄師範大学からも、学生たちが留学にやってきて、地域学部や厦門大学の学生たちと楽しい時間を過ごしている。地域学部から高雄師範大学への留学生はまだないが、地域調査実習以外にも卒論調査などで、学生個人が台湾で高雄師範大学の先生方や学生のみなさんにお世話になっている。

この他に韓国の梨花女子大学校とは２年間の交流実績がある。梨花女子大学校の学生たちを鳥取大学に迎えたのは３回、逆に地域学部の学生が２回梨花女子大学校でお世話になっている。互いにサポートし合って、学生も教員も関係が深まっている。また、2016 年度以降、吉林大学から毎年２名の交換留学生がきているほか、2019 年度には翰林大学校から交換学生がくることになっている。東アジアプログラム以外のところでも、次々と関係が生まれ、展開しつつある。

このように参加大学間の関係は年を重ねるごとに深まりつつある。互いの理解が増して、個人的にもつながって、緩やかなネットワークになりつつある。東アジアプログラムの発展は当初は全く予想できなかったことで、思えば不思議である。この点については、「Ⅱ．2017 年度プログラムの概要と『地域学』としての成果」で語られているので、これ以上の多言は不要であるが、「互いに配慮し合い、楽しむこと」が前提となっていて、その心地よさが次の工夫へとつながっているようである。

最後に地域学部地域学科国際地域文化コースにとって、東アジアプログラムは国際性を備えた人材育成という目的を実現していく重要な場の一つになっているといえるだろう。